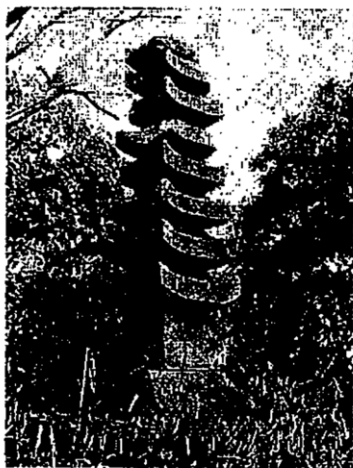


時の流れの生き証人

私たちの祖先が、本市に集落をつくり農耕生活を始めたのは、大和朝廷成立の前後にといわれています。その後、平穩、荒れ狂った戦乱の世などを繰り返して今日に至っています。風雨にさらされながらもその時の世相の流れをじっと見つめてきた証人が「石造物」です。その一つひとつが何かを意味し何かを語りかけてくれます。

市内には道標、石仏、記念碑などの石の文化財といわれるものがあちこちに多く存在しています。今号から、人目にふれないでいる市内の貴重な石の文化財についてシリーズで掲載します。



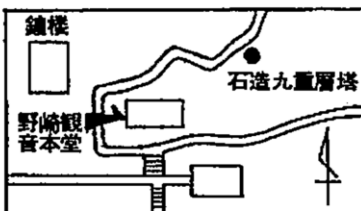
石造九重層塔

野崎観音裏山

野崎参りで知られる野崎、グリーゼンには、多くのハコヤカ本堂西側からつづら折りの階段を登ったところに、ひっそりと建っている市指定文化財の「石造九重層塔」。春、秋のハイキング

でなくなった最上層の屋根石を発見して大いに話題になった。

現在は、高さ二百八十センチの八重層塔。建立年代は、鎌倉時代後期の永仁二年（一二九四年）と刻まれている。礎石には、七十四字の石文が刻み込まれているが風化がはげしく全文を読みとることはできず年代の古さを感じさせる。



時の流れの生き証人

石造地藏菩薩立像

龍間



龍間バス停から青少年野外活動センターに向かい徒歩三分。右手に「曹洞宗龍光寺」の石碑が見える。碑のあるゆるやかな階段を五十段ほど登った左手奥に建つ地藏尊、隣りには石に囲まれた弘法大師像や小さな道祖神の石像もある。

この地藏尊は、幅六十五センチ、高さ百二十八センチの舟型の石に、身丈八十六センチの半肉彫。右手に錫杖（しゃくじょう）というつえ、左手に宝珠という宝のたまを持つた一般的な形である。像の左下隅に「延徳二庚戌三月」と刻まれた文字から一四九〇年に建てられたことがわかり、市内では一番古い地藏尊である。

当時は戦国の世で、土一俵に代表される民衆の台頭期にあたり、民衆の共同心に支えられ建てられたものと思われる。

